

「女性におすすりめ」という カクテルはなぜまずいのか

顧問先の企業にユニークで優秀な20代の男子がいます。つい最近まで、彼のことを、「女子力が高い」と褒めていました。取引先の手ごわい女性たちともボディケアや最新流行のスイーツの話題で盛り上がることで、すぐに打ち解けて仕事を進めていく力量が、「女子力」のなせる技だと無意識に思ってしまったからです。

しかし、そのように褒めると彼は不満を表明するのです。「男子力とか女子力とか、世間のジェンダー基準をもちこまれるのは不本意です。あえて言うならボクのジェンダーは、ヤマダ（仮名）です。ヤマダ力を発揮しているまでです」と。

もう一人、広報を専門とする知人にも、生物学的には男性のただけで、「女性顔負け」のきめこまやかな心遣いでどんなファンを作り、躍進している方がいます。彼もまた、「世間という（女子力）が高いのは自覚しているけど、へ女子力高い

ね」と言われるとムッとするんですよね。もともとこれは僕にあったタナカ力だから」と言います。「女性顔負け」という表現には偏見があったと反省した次第。

ジェンダーの区分などそもそも存在すらしないかのように、その人本来の資質を發揮して自由に仕事を進めている人は、関わっていて気持ちがよく、それゆえ周囲のみんなが楽しくなるので多くの協力者を巻き込むことができ、結果として、めざましい成果をあげているという好循環が見られます。

翻って自分の仕事の状況を考えてみると、おそらく世間という「男らしさ」とか「ますらおぶり」みたいな偏差値が高いほうではないか。この秋にはスポーツ系のメンズファッション誌5誌に登場したので、皮肉まじりに「メンズ誌制覇ですね」と揶揄されたくらいでした。20年ほど前からメンズ誌とは関わってきたのですが、長く続けられた

理由を振り返るに、「女性目線のコメントを」という注目を辞退してきた成果ではないかと思うのです。世間が期待する「女性目線」など、私にはわからないし、ない。意味不明な「女性目線」にすがっていたら、2〜3年で次の新しい「女性」にとりて代わられていたのではないかと「女子アナ」が取り換え可能なのと同じですね。「ジェンダーはナカノカオリ」ですがいいですか、という姿勢を貫いてきた結果、ありがたいことに50代半ばになっても頼られているような気がしています。

実際、「女性ってこういうの好きだよね」「男だったらこうすべきたよね」という語りほど、無意味なものはありません。「女性におすすりめ」というカクテルがおいしかった試しはついでない。甘いのです。「らしさ」の偏見を押し付けるとは人間を甘く見ているということなのです。本来秘める○○（↑あなたのお名前）力は何なのか。それを曇りなき目で見て、フルに發揮することが代替不可能なブランド力につながり、周囲にも持続的な幸福をもたらす例は少なくありません。あ、カクテルは超ドライでお願いしますね。

なかのかおり

1962年生まれ、富山市出身。株式会社Kaori Nakano代表取締役。服飾史家・エッセイストとして研究・講演・執筆をおこなうほか企業の顧問教授を務める。東京大学大学院修了。英国ケンブリッジ大学客員研究員、明治大学特任教授などを務めた。著書『紳士の名品50』（小学館）、「モードとエロスと資本」（集英社新書）ほか。監修した新刊『服を味方にすれば仕事はうまくいく』（ディスカヴァー・トゥエンティワン）が発売。

